

宮坂建設工業・時局講演会

検察は「おごり」排して

元検事・増井氏が信頼回復訴える

宮坂建設工業(帯広、宮坂寿文社長)主催の時局講演会が七日、京王プラザホテル札幌で開かれ、元大阪高検検事長の増井清彦氏(写真)が「よりよき検察の再建を願って」信頼回復の課題と方法」と題し講演した。

増井氏は札幌地検を振り出しに検事畑を歩き、大阪高検検事長を最後に平成八年退官。そのあと、日法科大学院教授などを務めた。

講演で増井氏は、大阪地検特捜部主任検事による証拠品改ざん事件について、背景などを分析しながら所見を示した。

平成二十二年に厚生労働省局長(当時)が課長時代の虚偽有印公文書作成・同行使容疑で逮捕、起訴され約五カ月間の拘留後、裁判所が無罪判決を下した同事件。増井氏は「検察に長く身を置いた者として申し訳なく、事件発覚後は顔を上げて外を歩けなかった」と苦しかった胸の内を吐露した。

「検察官が証拠隠滅、犯人隠避するなど言語道断」と批判し、事件の背景として「(警察の) 捜査報告書の記載を(検察が) 見落としたことも考えられる」と取り調べに無理があったと判決で指摘されており、人事の根本的な改革を考えなくてはならない」などと述べた。

「検察官が証拠隠滅、犯人隠避するなど言語道断」と批判し、事件の背景として「(警察の) 捜査報告書の記載を(検察が) 見落としたことも考えられる」と取り調べに無理があったと判決で指摘されており、人事の根本的な改革を考えなくてはならない」などと述べた。



講演会は、宮坂建設工業の創業九十年、札幌支店開設七十周年の記念イベントとして開催。約一千二百席の会場は建設業関係者や一般市民で埋まった。

検察官の心構えについて、増井氏は「市民の代理人であり、その協力なしには何もできないことの自覚と責任を欠いていなかった」と述べた。また、「おごり」の排除を強調。管理者は「自分を見失わないこと」、部下は「仕事への責任感が旺盛で、事務処理能力が高く、協調性があること」などを資質要件に挙げた。

北海道建設新聞 2011年(平成23年)6月9日(木曜日)

検察の信頼回復テーマに

宮坂建設工業が増井氏を招き講演会

宮坂建設工業(本社・帯広、宮坂寿文社長)は七日、京王プラザホテル札幌で元大阪高検検事長の増井清彦氏を招き、時局講演会を開いた。会場に集まった約1200人の聴衆は、増井氏が説く検察組織の信頼回復に向けた方策について耳を傾けた。



増井氏は京大法学部を卒業後、札幌地検検事を振り出しに、最高検刑事部長、東京地検検事正、法科大学院教授などを務

仙台高検検事長、大阪高検検事長などを歴任。1996年の退官後は日法科大学院教授などを務めていた。

約1200人が詰め掛けた

講演では、障害者郵便悪用事件での大阪地検特捜部検察官の証拠隠滅・犯人隠避を例に挙げながら、検察の信頼回復に向けた課題と方法について解説した。事件発生の際には、検察官の見通しの甘さや人事の硬直化などを挙げ、「検察官が自由に意見を述べられる環境になく、検討も十分に行われていなかった」と分析。取り調べ可視化については、立証上有用な証拠になることを認めながらも「真相究明の障害や法廷性が長引く要因となる可能性がある」とあり、全てで実施することは困難と述べた。最後は、信頼回復に向け「検察官は市民の協力なしでは何もできないことを自覚し、個人個人が誠実に地道に、果たすべき責任を果たしていく必要がある」と提言した。